

私は土地の境界確定作業を数多く業務として行っています。隣地同士と言うのは決して仲が良い人達ばかりではありません。日頃の生活で近隣者への不満が溜まっていると、この時とばかり不満が爆発する事がしばしばあります。境界に対しては文句は無いが隣地所有者への協力を惜しむ人もいます。この時私は相手の話を良く聞き粘り強く説得して境界確定業務を処理してきました。今回も相手の話を良く聞き境界未確定であることの弊害、将来に対する問題点等を説明して説得しようと思っていました。

しかしBさんは、聞く耳を持たないとの言葉はこの人の為にあるのではないかと思うほどの態度でした。私一人で合計4回Bさん宅ににお願いに伺いましたが毎回甲さん(Aさんの亡父)の悪口に終始し私の話など聞いてはくれませんでした。

そうこうしている内に、事情を知ったC会社が境界未確定でも現況面積で契約を結んでくれることになり私のBさん宅への訪問は無くなりました。AさんとC会社との不動産賃貸借契約も無事完了して私の仕事は終了しました。

さて、それから2年ほど時間が経過したある日、乙さんと名乗る人から電話がありました。乙さんはBさんの長男でBさんが亡くなった後前回問題になったBさんの土地を相続したとの事。そして、その土地を売却したいのだが境界確定にAさんが協力してくれないので何とかして欲しいとの連絡でした。以前私がBさんに渡した名刺が残っていて連絡してみたとの事でした。

実はAさんとはその後も仕事の付き合いがあり気軽に話ができる状態でした。私としては以前境界未確定で終了した案件でしたので記憶に残っていて今回境界を決めるチャンスであると思いました。ただ、Aさんの気持ちがどうなのかが心配でした。

その心配は的中しました。Aさんは前回Bさんに自分の亡くなった父親を罵倒された事を忘れていませんでした。「あの屈辱は一生忘れることはできない。絶対協力しない。」との返答でした。私は「確かにBさんのあの時の言葉は酷かったです。でも考えてみて下さい。今回あなたが乙さんのお願いを突っぱねて売買契約が中止になったら乙さんはあなたを恨むでしょう。そして、もしもあなたが亡くなってあなたの子供が土地を相続して今度はあなたの子供が乙さんにお願いにいったら相手はどういう態度に出るでしょうか？」

Aさんは暫く考えていましたが結果はNOでした。

結局何度か説得してみました。自分の亡くなった父親への罵倒に対する恨みの感情が強く境界確定の協力は拒み続けました。

そして、私はこの件から抜けることになりました。その後乙さんが土地を売却できたのかも分かりません。ただ、私の心の中に「何とかならなかったか？何とかできなかったか？」との思いが消えません。数年経った今でもこの件は心に鮮明に残っています。土地家屋調査士業界の格言として「杭を残して悔いを残さず」というものがあります。今回は正に「杭を残せず悔いのみ残った」結果となってしまいました。この時の気持ちを忘れず何世代にも係る境界についての業務を行っていきたいと思っています。